

ロイス・ジョンソン・エリクソン夫人と長田穂波

— キリスト教宣教師と癩文学の普及 —

Lois Johnson Erickson and Nagata Honami

— A Christian Missionary and the Spread of Leprosy Literature —

田中キャサリン

要 旨

本論文では、1909年に設立された香川県高松市のハンセン病療養所、大島療養所（現大島青松園）におけるロイス・ジョンソン・エリクソン夫人の翻訳作品を検討する。エリクソン夫人は1905年、アメリカ南部の長老派教会所属の宣教師として来日し、36年間、夫のスワン・マグナス・エリクソンとともに布教活動に従事した。エリクソン夫人はこの布教活動に、大島療養所で生まれた「霊交会」というキリスト教団体の会員の作品を英語に翻訳し、活用した。しかし、エリクソン夫人は、この「翻訳」を単に translation とは呼ばず、interpretation と述べている。この語の意味は、「翻訳」というよりもむしろ「解釈」や「意識」に近い。そのようなエリクソン夫人の翻訳のあり方の特徴に着目して、本論文では、「霊交会」における文学の実態とエリクソン夫人による「意識」との関係性について論じる。また、エリクソン夫人の翻訳が、療養所の患者の一人、長田穂波の文学を世に知らしめるきっかけとなったことも併せて明らかにしたい。

This article examines the activities of Lois Johnson Erickson at a Hansen's Disease hospital, Oshima Hospital (today Oshima Seisho-en) in Takamatsu, Kagawa Prefecture. She and her husband, Reverend Swann Magnus Erickson, a Southern Presbyterian minister, came to Japan as missionaries in 1905 and served there for 36

years. Erickson used literature in her missionary work, and as part of this she translated the writings of a Christian group in Oshima, Reiko-kai, and used them to publicize missionary activities and the Christian faith. As she herself states, rather than translations, her writings are interpretations of the original Japanese. This article examines Erickson's process of translation and argues that Erickson's translations were of use to the missionary community for fundraising and to demonstrate the success of the mission in Japan was precisely because they made the dense original more accessible to readers. Not only did Erickson's translations domesticate Honami's psalmic style, but the fact of her English translations served to garner Honami more recognition within Japan as well.

キーワード：ハンセン病（癩） キリスト教 文学 翻訳

1. ハンセン病とエリクソン夫妻

始めに、本論文で用いる用語について説明しておきたい。本論文のタイトル「エリクソン夫人と長田穂波—キリスト教宣教師と癩文学の普及」に含まれている。「癩文学」の語は、偏見や差別を含む言葉として、本来なら使用すべきではない。ここでは、それを念頭に置いた上で、あえて「癩文学」という表現を使用することをお断りさせて頂きたい。本論文では、特効薬プロミンが発見される以前の文学、(つまり「癩文学」)と、プロミン以後の文学、(つまりハンセン病文学)の共通点と相違点に注目したいためである。特に今回はその相違点を論じるため、「癩文学」と「ハンセン病文学」という二つの用語を次のような区別の元に用いたい。まず、癩文学とはハンセン病を不治の病として描いた文学であり、その際、作者はハンセン病患者として、発病と隔離の経験を有している。一方、ハンセン病文学は、ハンセン病が治療可能になった後に書かれた文学を言う。その場合、作者は患者ではなく「元患者」ということになるが、英語では「Survivor」という言葉が当てはまる。治療が可能か不可能かによって、ハンセン病の経験の描き方は当然変わってくるし、文学作品を通じた療養所外の読者との関わりも変わってくる。プロミンが登場した後、ハンセン病文学は人権回復活動に寄与し、偏見や差別をなくすために、政治的活動に関与する場面も生じる。これは、プロミンの出現以前にはありえないことだった。従って、プロミンによって、ハンセン病文学の社会的価値が大きく変わってきたとすることができるだろう。

また、ハンセン病の治療が可能になって以降に書かれたハンセン病文学作品には、治療可能となる以前に流行した癩文学と大差ない作品とみなせるものもある。以上の

ような両者の違いを踏まえて、本論文では「癩文学」と「ハンセン病文学」の二つの用語を使い分けたいと考える。

それでは、本論に移ろう。日本のキリスト教とハンセン病の関係は長い歴史を持っている。明治期の1889年、パリ外国宣教会の神父テストウィードによって静岡県御殿場市神山に神山復生病院が設立された¹。1909年に癩予防法に基づいて設立された療養所の中には、キリスト教の影響を受けたものもある。なかでも大島療養所²は、開設当初からキリスト教の影響を比較的強く受けていたと考えられる。大島療養所では、宣教師のエリクソン牧師とその夫人の熱心な活動により、入所者の中にキリスト教への入信者が多く見られ、夫人の大島療養所における影響力の大きさをうかがわせる。

エリクソン夫妻は、1910年頃から大島を訪れるようになり、1914年、三宅官之治（1879-1943）、長田穂波（1891-1945）の協力のもとに、大島療養所内にキリスト教団体「霊交会」を設立した。「霊交会」は病院内で礼拝を行うだけでなく、『霊交会報』という月刊誌も出版し、キリスト教に基づく文学活動を活発に行った。



エリクソン夫人が活動した時期の大島療養所³

- 1 戦国時代、ルイス・デ・アルメイダ牧師（1525-1583）が現在の大分県大分市にハンセン病患者を対象とする病院を設立した。戦国時代にはイエズス会宣教師の手でいくつかのハンセン病患者のための病院が開設されているが、江戸時代に閉院された。明治に入って最初のハンセン病専用病院は、後藤昌文（1826-1895）が1875年に設立した起廃病院である。神山復生病院の設立以降、宣教師による病院がいくつか設立されている。詳しくは荒井英子『ハンセン病とキリスト教』を参照。
- 2 現在は大島青松園と呼ばれているが、エリクソン夫婦が活動を参考した当時は大島療養所と呼ばれていたため、本論ではその名称を用いる。
- 3 ロイス・ジョンソン・エリクソン『日本における本道と脇道』（*Highways and Byways in Japan*）p. 126。

スワン・マグナス・エリクソン牧師 (Reverend Swan Magnus Erickson, 1881-1946) は、妻のロイス・ジョンソン・エリクソン夫人 (Lois Johnson Erickson, 1881-1960) と共に、大島療養所の文学活動に大きな影響力を持っていたと考えられる⁴。エリクソン夫妻は1905年にアメリカ南部の長老派教会員として来日し、36年間、日本で宣教師を務めた。来日してしばらくは神戸で日本語や日本文化を学び、その後高松に移った。二人が大島に来た時期は不明だが、1910年頃ではないかと考えられている⁵。



ロイス・ジョンソン・エリクソン (1915年)⁶

なお、エリクソン夫人については阿部康成氏の詳しい研究があるが⁷、私はここで、

- 4 エリクソン夫妻の孫エレイン・ルーベン (Elaine Luben) 氏にお礼を申し上げたい。彼女の協力により、エリクソン夫人の宣教師活動やアメリカ帰国後の生活に関する情報を入手することが出来た。ルーベン氏は長女イーデイスの娘である。付言すれば、夫妻の当時の宣教師は夫妻で活動することが多かった。エリクソン夫人自身は牧師ではなかったが、アメリカ、フィラデルフィア市の長老派教会歴史協会 (Presbyterian Historical Society) に残されている記録によれば、福音伝道 (Evangelistic) のためエリクソン牧師と共に日本に派遣された。なお、同記録では、エリクソン夫人も、エリクソン牧師同様「宣教師」となっている。
- 5 西脇勉氏は、エリクソン牧師は1909年に初めて大島を訪ねたとしているが、記録がないため、あくまでも推測であり、確認は取れていない。西脇勉「エリクソン宣教師と大島療養所—我が国救癩史の一齣に残したある宣教師の軌跡」(『四国学院大学論集』第42号 (1978年12月) p.41-57頁) 参照。
- 6 長老派教会歴史協会のアーカイブズ所蔵の写真。表側に撮影年 (1915) がペンで書かれ、裏側には「Mrs. S. M. Erickson Takamatsu Japan Sept 24/15」と記されている。写真掲載の許可をもらってくださって長老派教会歴史協会に感謝したい。
- 7 エリクソン夫人と穂波の関係について、また、穂波自身に関する情報について件、阿部康成氏は「読めない詩—癩療養所長田穂波と訳詩者ロイス・エリクソン」、1-29頁に詳しい。阿部氏は同論文の中で、ハンセン病文学における穂波の位置を論じながら、穂波の詩の統語も細かく分析している。

エリクソン夫妻の親戚への聞き取りによって新たに明らかになった事実を報告したい。エリクソン牧師は、1881年、スウェーデンからアメリカに移住した両親のもとに生まれ、ミネソタ州で育った。同州のハメルン大学を卒業後、牧師となり、その後アメリカ南部の長老派教会の牧師としてアラバマ州で働き始める。アメリカ南部の長老派教会はアラバマ州、アーカンソー州とルイジアナ州にあった。

一方、エリクソン夫人は、1881年にアメリカ南部のバージニア州で生まれ、テネシー州で育った。エリクソン牧師はアーカンソー州でエリクソン夫人の出演していた演劇を見る機会があり、二人はその時に恋に落ちたとされている。二人は出会って間もなくアラバマ州で結婚し、来日した。日本で娘二人を生み、30年以上にわたって四国の高松市で活動した。



エリクソン夫妻の家族写真⁸

8 エリクソン夫人は大島療養所によく通ったにもかかわらず、娘たちを大島療養所に行かせなかった。この日付のない写真は長老派教会歴史協会のアーカイブズ所蔵の写真である。写真掲載の許可をもらってくださって感謝したい。長女は1908年に生まれたイーディス [Edith]。次女は1909年に神戸で生まれたエリノア [Elinor]。

2. 霊交会の文学と意識の問題

以上がエリクソン夫妻が来日するまでの経歴だが、ここで特に注目したいのは、エリクソン夫人による大島療養所内のキリスト教文学の翻訳活動だ。「翻訳」という言葉を使ったが、エリクソン夫人自身は、translationではなく、interpretationの語を使ってだと述べている⁹。interpretationという語は、「翻訳」というよりも「解釈」や「意識」に近いものを意味し、テキストよりも間テキスト (intertext)、つまり原文と意識の関係に注目しながら、テキストとテキストの間に埋められた新しいテキストと考えられる¹⁰。

来日以降、エリクソン夫人は文学作品を使って布教活動を報告した。最初に、アメリカの救癩協会の季刊誌『営所の外に出て』(*Without the Camp*)に、大島療養所での文学作品や活動レポートを発表した。エリクソン夫人による大島療養所の霊交会会員の作品の翻訳は、同誌での掲載に加え、いくつかの媒体で公表されている。1920年代前半以降、穂波と霊交会員の詩と作品や大島での宣教活動の記録が、エリクソン夫人の出版した二冊の書籍で紹介されている。『日本の白原』(*The White Fields of Japan*)と『日本における幹線道路と裏道』(*Highways and Byways in Japan*)である。それらの本には、作者名は記載されていない。また、『世界秩序の基礎』(*Foundations of World Order*)という宣教活動を紹介する別の著書で、エリクソン夫人は日本での活動に「日本で報いられたこと」("Not in Vain in Japan")という一章を割いているが、そこでは、大島での活動の成功例を紹介しながら、戦争の恐怖を訴え、平和のメッセージを書いた。その後も、アメリカに帰国後の1949年に、日本のキリスト教文学について記した『日の本にて歌う』(*Songs from the Land of the Dawn*)を刊行し、この著書でも大島療養所の患者の詩を紹介している¹¹。

大島療養所の文学を中心にした英訳本は三冊あり、それらのうちに二冊、『不屈の魂』(*Souls Undaunted*) (刊行年不明、戦前)と『鳥のように逃れて』(*Escaped as a Bird*) (刊行年不明、戦後)は小冊である。『不屈の魂』には頁番号が無いが、合計で28頁、『鳥のように逃れて』は、『不屈の魂』の詩に新たに27編を加えた増補版で、合計31頁。これら二冊冊は挿絵は共通だが、表紙が異なっている。また、『不屈の魂』には二つの異なった表紙が見つかったので、少なくとも一度は再版されたことが

9 翻訳と意識の違いについては、ユージン・A・ニイダ、チャールズ・R・テイバー、ノア・S・ブランネン著 (沢登春仁、升川潔訳) 『翻訳—理論と実際』 (研究社、1973年) が詳しい。

10 ロランス・ヴェヌーティ「翻訳、間テキスト性、意識」 Venuti, Lawrence, "Translation, Intertextuality, Interpretation," *Romance Studies* Vol. 27 No. 3, July 2009, p. 172 参照。

11 これらの著書に加え、エリクソン夫人はさらに1935年、賀川豊彦の詩の英訳、『貧民窟にて歌う』(*Songs from the Slums*) も出している。

あると推測される。『不屈の魂』は詩と挿絵だけで構成されているが『鳥のように逃れて』には救癩協会の委員でもあったキリスト教作家、ウォルター・ファンカット (Walter Fancutt) の序文が付されている。これらに冊の内容は全く同じとは言えないが、多くの重複部分を共有している。

エリクソン夫人はこのように大島療養所の文学作品を数多くの媒体で紹介したが、原文と翻訳テキストを比較して読めるものに、長田穂波の『みそらの花』(1928年)とエリクソン夫人の英訳書『燃ゆる心』(*Hearts Aglow—Stories of Lepers by the Inland Sea*) (1938年)がある。本論文の中心的な作業は、これらの原文と英訳を比較して読むことである。そ際、時に訳者エリクソン夫人と作者穂波の声が交錯する、間テキスト性に注目していきたい。

このようなエリクソン夫人の翻訳のあり方の特徴に着目して、本論文では、キリスト教集団による文学の共有と、エリクソン夫人による「意識」との関係性について考えていく。また、穂波の文学が知られるようになったきっかけの一部は、エリクソン夫人の意識だったことも明らかにしたい。¹²

エリクソン夫人はアメリカ南部や神戸、高松において、キリスト教文学を通してキリスト教を伝道する信仰者であり、大島でも一般の人々に対して文学を利用した布教活動を行った。また、エリクソン夫人の活動は、大島療養所と他の療養所の信者の間に、文学を通じた交流を生んだと考えられる。たとえば、長田穂波には、九州のキリスト教系の回春病院や沖縄在住の青木恵哉 (1894-1969) と交流があった、という記録が残されている。¹³ 穂波はキリスト教の説教に用いる文章なども書いたが、エリクソン夫人は彼の文学作品のみを翻訳した。このことは、夫人が、説教より、文学を用いたキリスト教の伝道の方が、より効果的と考えていたためと推測できる。

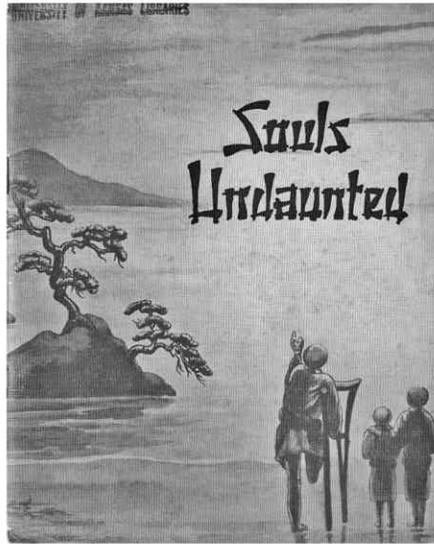
エリクソン夫人の翻訳によって難解な日本語の原文が親しみやすい形になり、海外の人々の心に伝わっていった。夫人は、ことにキリスト教の信仰が美的に描かれた作品に注目し、意識の仕事に専念したように思われる。大キリスト教とハンセン病を描く島療養所で創作された作品には、文学的に見て興味深いコントラストが生み出されている。

たとえば、エリクソン夫人によって意識された詩では、多くの場合、地獄としての

12 エリクソン夫人は長田穂波の英訳表記を Nagata Honami とした。また、『みそらの花』や『靈魂は羽ばたく』には、穂波の名前はルビで「長田」になっている。穂波本人は、「長田」の読みとして「ながた」と「おさだ」両方を用いていたようである。阿部康成氏の研究によれば、「おさだ」のほうがよく使われたという。阿部康成「『靈交』にあとがきを記す—香川県大島の療養所をあらわす点描」『滋賀大学経済学部 Working Paper Series』No. 150, 2011年7月、p. 2 参照。

13 青木恵哉『選ばれた島』新教出版、1972年。これも匿名翻訳者によって『沖縄への布教』(*Mission to Okinawa*)として英訳されている。

「病気」と天国としての「信仰」が対比的に描かれることによって、鮮やかなコントラストが生み出されていく。¹⁴ 病気によって失われた価値観が、キリスト教によってふたたび見出されるのだ。このコントラストは意識の小冊の挿絵にも描写されている。たとえば、『不屈の魂』のカバーに、重病の患者が子供に美しい景色を指している。神が作った美しい自然と患者的の崩れた体のコントラストは、詩のみではなく、挿絵にも示されているのである。従って、このコントラストは様々なレベルでテキストの中に含まれていると言える。



『不屈の魂』の表紙

詩の例を一つみていきたい。エリクソン夫人の翻訳詩集『不屈の魂』には、以下のような無題の詩が掲載されている。

Since parting from my father	父と別れてから
I have watched	十年もの時を
Ten slow years roll;	経て来ました
Lost is the father of my flesh	肉の父をなくしましたが
But found	魂のお父様が
The Father of my soul!	見つかりました! ¹⁵

“Shinja”

¹⁶
信者

14 同じコントラストは日本語原文においても目立っている。詳しくは、Kathryn Tanaka (2012年) と阿部康成氏 (2013年) に参考。

15 本論文中の詩や引用の日本語訳および英語訳はすべて筆者によるものである。

この詩においては基本的に、肉の父と魂の父が対比されている。最後の行の大文字のFで始まる「父」(Father)は神を指している。この詩は、肉親の父とは別れたが、自分の魂の根源につながる神を見つけたという内容になっており、病気のために父を失くしたが、キリスト教によって新たな「父」と出会ったという展開の中に、静かな平安を得た作者の安息を感じることができる。

この詩については、エリクソン夫人が自身の翻訳を「意識」と位置付けていることにも注目したい。この英訳詩の日本語で書かれた原詩は明らかになっていないが、詩に限らずエリクソン夫人が訳した詩の多くは原詩がどのようなものだったのか判明していない。訳詩は、英語で couplet と呼ばれる二行連句に近い形になっているので、原詩は俳句や短歌だったのではないかと推測される。¹⁷ 1920年代前半以降、俳句や短歌を英訳する際には二行連句に近い形が採用される場合が少なくない。

引用した英訳は古風な趣のある詩になっている。たとえば、普通の英語だと、The father of my flesh is lost だが、この訳では、Lost is the father of my flesh となっている。これはもちろん、Lost という過去分詞を強調するためであるが動詞を文頭に置くくと古風な英語の味が出る。また、この詩には受動態が使用されているが、これは詩では主語を欠く場合が多いための工夫と考えられる。

ここに、エリクソン夫人が「意識」の形で翻訳を行った際の問題点がある。また間テキスト性の問題にも注目する必要がある。なぜならば、日本語原文が明らかでない場合も、日本文学の interpretation として、アメリカや日本のキリスト教信仰集団内で流布した作品が少なからずあるからだ。更に、日本では、穂波の詩が英訳されたという事実が、詩それ自体よりも注目されたことを考慮に入れる必要がある。

先の「信者」の詩はエリクソン夫人の翻訳詩集『不屈の魂』に収録されている。この小冊子は、大島療養所のキリスト教詩壇(The Christian Poetry Club at the Oshima Leprosy Hospital in Japan)による翻訳とされているため、この詩はまず『靈交』という雑誌に掲載された後翻訳されたと推測される。が『不屈の魂』に収録された他の訳詩も、原文の出処が明らかにされておらず、それらが『靈交』に掲載されたのかどうか、確認することはできない。また、実際原詩の形式が自由詩だったのか、俳句だったのか、短歌だったのかも、すべて不明だ。穂波は自由詩を好んだが、翻訳された詩の多くは、二行連句に近い短い詩や、韻を踏む形式に訳されている。

上記の通り、『不屈の魂』に新たに27編の詩を加え、1篇を削除して出版された『鳥

16 『不屈の魂』頁番号記載なし。作家の名前として、“Shinja”と記されている。もしかして、日本語では「信者」にあたりと推測ができる。

17 俳句の英訳については、川本皓嗣『日本詩歌の伝統—七と五の詩学』(岩波書店、1991年)が詳しい。とくに、194-212頁に参照。

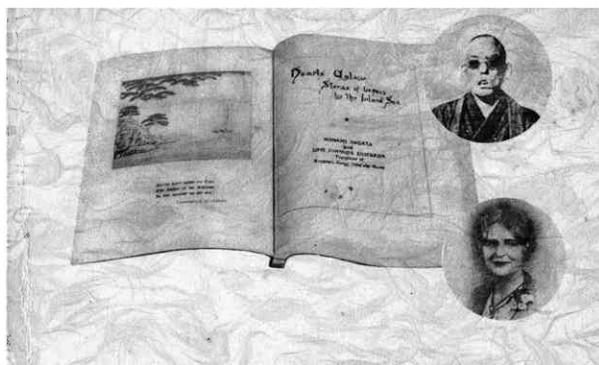
のように逃れて』も、『不屈の魂』と同様、原詩の日本語がどのようなものだったのか判明していないものが多数を占める。出版の際、『不屈の魂』所収の詩から唯一削除されたのは以下の詩だ。

Before I knew	癩者だと
I was a leper	知る前に
People used to ask	人々は尋ねた
What make-up I could use	どんな化粧品を使えば
To keep my face so beautiful!	それほど顔を美しく保てるのかと！

18
Shirano

この詩が削除された事実は大変興味深い。削除された真の理由を知ることはできないが、他の詩と比べ、この詩の内容が世俗的であるためではないかと推測される。また、天国や神への賛美や病苦について歌っている詩もあるが、この詩はそれらと異なり、恐ろしい病気がもたらす「美しさ」を皮肉を込めて歌っている。この詩の原詩はまだ見つかっていない。また、他の詩に比べて、この意識は比較的口語的に訳されている。脚韻も使っておらず、他との詩とのスタイルと違いが著しい。しかし、削除の理由そのものは相変わらず不明である。

3. エリクソン夫人による長田穂波の『みそらの花』意訳



『燃ゆる心』に差し込んだ葉書

ここからは、実際に英訳と日本語の違いを比較が可能な長田穂波の『みそらの花』

18 『不屈の魂』頁番号記載なし。

と、その翻訳としてエリクソン夫人が手がけた『燃ゆる心』(*Hearts Aglow*)を比較していきいたい。阿部氏が指摘したように、この場合は「翻訳」と言うより「共著」と考えたほうがよいと思われる。¹⁹『燃ゆる心』は長田穂波の『みそらの花』の訳だけではなく、「霊交会」(Christian Poetry Club)の詩も掲載されている。『みそらの花』は基本的に穂波が霊交会のメンバーとの経験を語る本である。穂波が語って14人の伝記から、エリクソン夫人は9人を選んでいる。そして、『燃ゆる心』の内容は『みそらの花』に負う件が多いが、また出所の異なる詩も加えられている。これはエリクソン夫人によく見られるパターンである。『日の本にて歌ふ』という英訳本には、賀川豊彦の詩を中心に、大島療養所の入所者の詩も含め、また山室軍平(1872-1940)の詩や松尾芭蕉(1644-1694)の俳句も英訳して収められているので、著者名は/by Kagawa Toyohiko and other Japanese Poets/ (「賀川豊彦氏と他の日本詩人」となっている。同様に、『燃ゆる心』は穂波の作品が中心になっているが、他の著者の作品も収録されている。その意味で、『燃ゆる心』に挿入された葉書は興味深い。葉書にも、穂波とエリクソン夫人の写真を一緒に印刷し、外見的に「共著」として本を紹介している。従って、この英訳書を読むには、訳され方が大切になってくる。「翻訳」ではなく、「意識」されているからである。その事実から何が生まれてきたのか、具体的な例を見ていきたい。

エリクソン夫人のテキストの構造自体が興味深い。まず、エリクソン夫人にとって「意識」とは何だったかについて考えていきたい。『燃ゆる心』の中では、次のように述べられている。

“In retelling these stories, I have allowed myself all freedom. In some I have given explanations and descriptions to make a vivid setting for the picture. In others, Nagata’s style and mine and intermingled... I have not tried to preserve the form in which they were written, but rather to take the beautiful thought in the mind of the author and put it in the reader’s heart.”

(この話を再び語る²⁰とき、私は自分に十分な自由を与えた。まず、設定を鮮明にするため、説明や描写を加えた。また、長田の文体と私の文体を混合した... 文体を書かれた通りに保存しようとせず、むしろ作家の脳裡にある美しい思いを、そのまま読者の心に伝えよう試みたのです。²¹)

19 この点については、阿部氏(2013年 p.9)。また、Tanaka(2012年、第2章)に参照。

20 Retelling は翻訳を指しているが、エリクソン夫人は英語の translation という語の使用を避けていた。そのため、ここでは「翻訳する」という語の使用を避け、「語る」とした。

21 Erickson, Lois Johnson, “A Word of Explanation” (一言の説明)『燃ゆる心』p.3-4

ここに書かれているように、エリクソン夫人は翻訳に際して穂波の作品を逐語訳せず意識している。その意味で、エリクソン夫人は穂波の共著者であったとも言えるだろう。

『燃ゆる心』には、穂波作品の内容を補足説明しているところが多く、穂波自身の記述を踏襲した箇所もあれば、エリクソン夫人の加筆箇所もある。神田慶三の話为例に引こう。『みそらの花』の「一家離散遍路の旅に」という章に慶三の伝記が述べられている。エリクソン夫人は「生まれ変わった男が輝きながら立ちだす」(“The New Man Stands Forth Shining”)の章で慶三の話を取り上げている。慶三は発病とともに家族を失って苦悩し、犯罪まで犯して大島療養所に強制的に入所させられた後キリスト教の信仰者になった。穂波の「一家離散遍路の旅に」の章は詩から始まるが、エリクソン夫人はその詩を意識せず、直接穂波の散文から訳し始める。

「広島市から離る、凡そ三里の所、海辺に小さき町がある。此処の産業は「かもじ」と広島名物の牡蠣とである。冬期には全国の各都市の、川や港に屋形船を浮かべて、料理業を営むのである。」²² [穂波]

「Hiroshima is famous for wigs and oysters. In little mud walled, straw thatched villages the able-bodied till the paddy fields, while old people and children busy their fingers with frowsy bales of coarse black hair. When autumn comes the young men stock their oyster boats and set out for large cities. A few crude earthenware pots, several bags of charcoal, some wooden buckets of cold, unsalted rice, the oysters, and needful crockery and chopsticks change the boat into a restaurant.」

(広島は桂と牡蠣で有名である。泥壁や藁葺家の小さな町に、健康なものは水田を耕しながら老人や子供は黒く硬い髪の毛のだらしない棚で指が忙しい。秋になると青年は牡蠣の船を仕入れ、大きな都市へ向かう。少数の粗末な陶器、いくつかの木炭の袋、多少の塩無しのご飯の木製容器、そして牡蠣、必要な皿と箸によって船がレストランに変更する。) [エリクソン夫人]²³

これでエリクソン夫人の「設定を鮮明にするため、説明や描写を加えた」事情がよく理解される。「描写を加える」はエリクソン夫人の翻訳の大切な部分である。ロランス・ヴェヌーティベヌチの研究によれば、翻訳は目的の言語や文化に応じて、その言語や文化に順応 (domesticate)²⁴ させられる傾向がある。そのため原文の意味や統

22 『みそらの花』 p.3

23 『燃ゆる心』 p.7

24 Lawrence Venuti, *The Translator's Invisibility: A History of Translation* (2nd ed.), Routledge, 2008年

語、価値などに変化が生じる。エリクソン夫人の場合は、異文化のエキゾチックなところを削除したり、説明を加えたりしている。欧米人に理解できるように日本の「小さき町」の住いや生活の描写を穂波の原文よりはっきり記述する。屋形船の料理業を穂波より詳しく説明されている。上に示した抜粋はエリクソン夫人と穂波の「共著」と言ってもいいだろう。

しかし、穂波の原文の直訳もある。エリクソン夫人自身もこれを「双子」(“Twins”) (『みそらの花』では「双児の孤児」) という伝記の序で説明している。そこでは、エリクソン夫人は直訳 (direct translation) するときには、引用符で記する、と書いている。²⁵しかし、エリクソン夫人は「直訳」の場合も、上記のような説明を加え、穂波の古風な文を現代人にも親しみやすくする工夫をしている。だから、「直訳」と書いてもエリクソン夫人の英訳は穂波の原文を domesticate する役割を果たしている。

直訳と言っても、エリクソン夫人のテキストには、夫人の声と穂波の声が共存しているところがあり、これは翻訳のエリクソン夫人のテキスト構造の特徴である。慶三の話にもどれば、エリクソン夫人は以下のように慶三の話を結んでいる。

I saw Keizo when I was at the hospital the other day. He is quite blind now. But for years the marks of dishonesty, sensuality, hate, and despair have gone from his face. Behind all the distortion shines a happiness which startles. Nagata, fellow sufferer, ends his story thus quaintly:

“The knowledge of this good doctrine caused the wish to hear boil up within him. From baptism Keizo is a man living a resurrected life. In joy or pain, grief or gladness, he gives thanks. We can prophesy the future with confidence, for Christ liveth within him.

“The old self

And the sin,

All cleansed and purified before the Cross

The new man stands forth shining!

O Keizo, blind,

But praying always with deep love and tears,

Salt of the earth, light of the world,

May all the journey left you be

Of Heaven truly more than blessed.

25 『燃ゆる心』 p. 35

Amen.

(先日、病院に行ったとき慶三に会った。今では完全に盲目になっている。しかし、数年来の、詐欺、好色、憎しみ、絶望の痕跡が顔から消えている。盛んなる歪みの後ろから、びっくりさせる幸せが輝いている。同じ病に苦しむ長田はこのような風変わりな話で結んでいる。

「この良い教義の知識によって、聞きたいという希望湧かせた。洗礼によって慶三は復活した生活を送っている。喜びでも、苦しみでも、悲しみでも、幸いでも、感謝を送る。キリストが彼の中に住んでいることによって自信をもって未来を予言できる。

昔の自己

そして罪

十字架の前に全ては浄化され、清められた

真新しい人間が輝きながら先に立つ！

オー、慶三よ、盲目の君

しかし深い愛と涙でいつも祈っている

大地の塩、世界の光

残された旅はすべて

神からの恩恵を受けるよりも本当に天国のようであろう

アーメン)²⁶

この結びには、エリクソン夫人自身の声が混入している。三人称の語りから一人称の語りに移行してからである。エリクソン夫人は「私」(I)を前面に出しながら慶三に関係する自分の経験を語っているのである。この「私」によって、テキストの隠れたはずの翻訳者が明らかになる。エリクソン夫人が自分の経験を語ることでそれがそのまま、穂波のテキストの補足になり、そして、このナレーターとしての「私」が出ると、同時にそれは意識の域を脱して瞬く間にエリクソン夫人自身のテキストになっている。同様に現象が、「双子」(“Twins,”「双児の孤児」)の話の中でも起こる。これは病気が急速に悪化している双子の話だが、そこで、エリクソン夫人自分の目に映じた病気の子供の悲劇と信仰の輝きについて語っている。²⁷

しかし、穂波自身の声はこのテキストに聞くことができるだろうか。エリクソン夫人はよく、上記のように、「同病者長田は古風で、このように話を結ぶ」とか「長田がいう」(“Nagata says”)²⁸と、直訳で記しているが、これも意識だといえよう。穂波

26 同書 p. 27-28

27 同書 p. 41, 95

28 同書 p. 43

の自伝の場合も同じだ。エリクソン夫人はほぼ直訳（close translation）しながら穂波の話を紹介する。慶三の伝記と違って、穂波の自伝は、穂波的にある一人称の語りになっている。このような特徴があるにもかかわらず意識と同様な訳だとしか考えられない。

直訳と記した先の慶三の話の原文を見ていこう。穂波はいつも霊交会の会員の伝記をその人に宛てた詩で終える。慶三の場合は以下による。

善き教なるを覚えさせ、一つの感動をうけたと共に、一度教を聞いて見度いという求道心は、この時湧いて来たのであった。其後の彼は霊交会に加はり、霊育されて受洗の光栄に浴した。現在の如く両眼共に失明し、体の自由を失ひて後も、其他、吉凶禍福一切の出来事にも唯感謝して、多くの求道者を導きつつある。彼慶三は爾来全く更生せる生命に生きて居る。最早後日を予言しても大丈夫であろう。キリスト彼の内に生き給ふ故に。アメン。

古き人、罪の身は
十字架の血に拭はれて
現はれ出でたり眞生命の輝き。
涙と愛に
絶えず祈る盲人
地の塩、世の光なる我が慶三の
人の世の残る旅路に
オー天よりの祝福あれよ。

アーメン。²⁹

もちろん、エリクソン夫人はこのテキストに補足を加えていない。確かにこれはエリクソン夫人のテキストは穂波のテキストにほぼ忠実であるが、エリクソン夫人のテキストには、霊交会の話がないし、また、多くの求道者という言葉もない。しかしこのような細かいところより、穂波の「古風」とエリクソン夫人の読みやすい訳がコントラストになっている。また、穂波の最後の詩は「祈り」になっており、ここに見られる。「アーメン」は、讚美歌のように声を出して祈っているのだと考えられる。テキスト上には、この「アーメン」と前出の「アメン」との相違は、「ア」か「アー」の発音である。「アメン」という表記の使用も、讚美歌と散文のテキスト機能の違いを強調することにあると考えられる。

翻訳のテキストはもともと複雑な間テキストである。エリクソン夫人が穂波その他

29 『みそらの花』 p.22-23

の大島療養所入所者の文学作品に対して行った翻訳作業は、欧米文化に順応せ、より親しみやすくすること意図した「意識」だったと考えられる。では、エリクソン夫人によるそのような「意識」はどのような問題を生み出したのだろうか。エリクソン夫人の意識による英文、穂波による原文とでは表現された意味が微妙に異なることもあり、英訳が新たな作品になっていると言えるようなケースもある。たとえば、エリクソン夫人の意識では、大島療養所は安息所とされ、偏見や差別のある療養所外部の社会と比べ、安全に治療を受けることが可能な場所であるかのように描かれている。私はすでに一度でこの描写について論じているので³⁰、ここでは詳細は省くが、共通に言えるのは、入所者たちは宗教によって平和と心の平安を見出すことであるとされている。

宗教による慰めは、エリクソン夫人の出版物において、特に強調されている。たとえば、『燃ゆる心』の序文では、入所者の病気による苦しみとキリスト教による慰めが次のように語られている。

“Each patient has his tale of suffering. Many have been driven away from their homes... And many have found, when at last they have been taken to the beautiful island, not only comfort and security and a measure of healing, but the knowledge of a Father Who loves them. This has transformed their lives.”

(患者は、一人ひとり苦しみの物語をもっています。多くの者は家から追い出され...そして多くの者は、この美しい島に連れて来られることによって、やっと安楽と安全を現出ただけでなく、愛してくださる天のお父様を知ることができたのです。それによって、³¹彼らの人生は変わりました。)

このように、序文では、患者の安心は病院での治療だけではなく、宗教との出会いからも生まれるということが強調されている。穂波を始めや霊交会会員の作品には、キリスト教による慰めが詳細に語られているがそれをエリクソン夫人がは簡略化し、親しみやすいものにしようとした。確かに彼女の功績は大きいですが、原文の複雑な美しさに変更が加えられていることも否定できない。

たとえば、穂波の『みそらの花』には「順礼姿で一人旅」という挿話が収められている。この話は、みよという少女のエピソードを綴ったものだがエリクソン夫人の意識と穂波の原文とでは、彼女の悲劇を語るという内容は同じであっても、その語り口

30 Tanaka (2013) を参照。

31 『燃ゆる心』 p.3

は大きく異なる。

みよは幼い頃に母親を失い、父親の深い愛情を受けて育つが、ある日父親が再婚し、二人目の母親と上手く関係を築けなかったため、隣村に子守奉公に出された。やがて十歳の時、そして、彼女は乃木將軍の殉死とその御霊車を見送った後、癩病と診断され、実家に帰るしかなくなる。最初、父親はみよとの心中を囚ったが、隣人に助けられ、結局みよは義母に巡礼の旅に出されることになる。その後、四年をかけて四国を回った後、大島療養所にたどり着き、みよはそこでキリスト教の信者になった。

以上の内容は、エリクソン夫人による英訳でも穂波による原文でもほぼ同じである。しかし、両者はみよのエピソードの伝え方の点で大きく異なる。例として、結びの部分と比較してみたい。エリクソン夫人によるみよの話の結びは次のようなものである。

For many years now, she has been safe and sheltered, and the doctors have stayed the progress of the disease. She has found peace of soul in the little Chapel of the Cross. But beyond the beauty of the sea around her, she can look to the mountains of Shikoku, and she knows that hundred of homeless wanderers still crawl to those temples³² for relief.

Often it all comes back. When the winds rage, they whip again her ragged garmets, and she feels the rain drip into her flimsy shelter. Heat and hunger are not forgotten, nor cold and weariness and pain. One little pilgrim suffered so much, and many, many still are suffering...³³

(長年、彼女は安全に保護され、医師が彼女の病気の進行をくい止めていました。彼女は十字架の小さな礼拝堂で魂の平安を見つけました。しかし、自分を囲む美しい海の向こうに、彼女は四国の山々を見ることができ、何百人もの家もなくさまよう人々が、まだお遍路のお寺に安心を求め、その門をくぐっていくことを知っています。

みよはよく思い出します。風が強くとくとき、ぼろぼろの服にその風が吹きつけ、粗末な小屋で雨漏りに耐えなくてはならなかったことを。あの暑さも空腹も、そして、寒さも疲労も痛みも決して忘れることはできません。みよのような小さな旅人が大変な苦勞をし、多くの、多くの人々が今もなお、苦惱し続けているのです...)

一方、穂波は以下ような詩でみよのエピソードを終えている。

人はパンのみに由りて活かない Man does not live on bread alone

32 “those temples” は四国八十八ヶ所のお遍路のお寺を目指している。

33 『燃ゆる心』 p. 123

実に人の奥意の求めは	How deep
如何に深刻なるものであらう	The true desires of men!
教へにても	Neither through teaching
儀式にても	Nor through ritual
充たし得ざる深き憧憬	Can the deep longings be satisfied
もし是をしも充たしくるる者あらば	If there were one who found this fulfilled
彼女は凡てを投げ捨てて	She would throw everything away
其の一つを抱きしめたであらう!	And holds that one thing close!
人の心の底深き流れに	Through the deep flow of the hearts of humans
我はそそがん事を祈る	I pray for awakening
全身の血と涙との生命を!	Of all the body's blood and tears and life!
イエスの恵と愛に	The blessings and love of Jesus
結ばるる満足	Bring satisfaction
そこに真の神の国がある。	There is the kingdom of the true God.
聖霊の御働きかけ	The Holy Spirit at work
ひたに祈る	I beseech in prayer
祝福の手の豊ならんことを	That she be blessed by the hands of benediction
オー愛するみよ姉に幸あれよ。	Oh! I wish happiness to my beloved sister Miyo. ³⁴

次に、穂波のレトリックのスタイルを見ていきたい。穂波の詩は日本語でも英語でも意味を汲み取るのが困難だが、人間は容易に満足を得ることが出来ないが、キリスト教の信仰によって幸せと満足を得ることができる、要約してもいいだろう。穂波は宗教的なレトリックを多く用いているが、その文体は讚美歌に近いと言ってよい。³⁵しかし、キリスト教信者にとってはなじみの深いこのようなスタイルも、一般の人々にとっては不慣れな文体であろう。³⁶こうした事実から考えて、穂波の読者の多くはキリスト教信者であつたらうと推測できる。

文体の相違だけではなく、もう一つ大きな違いがあつた。それは、『燃ゆる心』に挿絵を入れたということである。この挿絵を入れたのかは、推測になるが、日本やハンセン病のことを知らない外国の読者の理解の手助けのためだつたのではないだろうか。みよのエピソードに付された巡礼姿のみよの挿絵もエリクソン夫人の行った「意訳」の一部であると考えられる。

34 『みそらの花』 p.20-51

35 Tanaka (2012) p.131

36 阿部 (2013) p.16-20



『燃ゆる心』 p. 121

このように、穂波の文体を変更したことに加え、挿絵を付したことも、エリクソン夫人の意識が、作者の言わんとするところを簡略化し、読者にとって親しみやすいものにしようとしたためと考えられる。

エリクソン夫人による意識が、穂波の原文と異なるスタイルで書かれていることを念頭においた上で、彼女の意識がキリスト教文学や癡文学に対してどのような役割を果たしたか、それをここでは考えていきたい。

穂波の原文でも、エリクソン夫人の意識においても、その結びにおいて神への信仰が強く語られていることは共通している。また、みよから一般の人々に目が向けられている点も同じである。しかし、エリクソン夫人による結びでは、それらに加えて「救わなければならない患者がまだ多く残されている」ということもまた強調されている。穂波は世間一般の人々に対する祈りについて述べているが、エリクソン夫人は世の中のハンセン病患者全てに目を向けている。これは両者の最も顕著な違いだと言える。このように、穂波のレトリックのスタイルとエリクソン夫人のスタイルは全く異なる。

穂波が最も多く書いたのはキリスト教文学で、讃美歌のような詩や英米キリスト教思想を扱った詩を多く残した。たとえば、よく讃美歌で使われる統語法、省略符号やカタカナを使って文体を強調する手法を多く用いることが穂波文学の一つの特徴だと言えるだろう。讃美歌はもちろん神を讃美するものであるが、喜びや強い感情、感嘆文などを使う讃美歌は少なくない。穂波の詩もこの讃美歌の修辞学的手法を用いている。

4. エリクソン夫人の翻訳のキリスト教布教団における普及と利用

穂波は、その文学作品によって日本のキリスト教信者にはよく知られた存在となるが、エリクソン夫人の訳書も、宣教師たちの間で知られるようになった。以上述べてきたように、エリクソン夫人は1920年代前半、大島療養所の入所者たちの作品を掲載した『営所の外に出て』を出版した。かなり早い段階から、大島療養所におけるエリクソン夫妻とその布教団の仕事の内容やキリスト教への入信者増加の成果が知られるようになっていた³⁷。その結果、大島療養所の布教団への基金が集まるようになったのである。英訳された詩の中にはこうした基金へのヒントが含まれている。たとえば、『燃ゆる心』の中には、エリクソン夫人自身の詩も含まれている。

The gold that we offer our Lord today	(今日我々が神様に差し上げる黄金
(If in love 'tis given)	(もし愛で差し上げたら)
To the lepers, blind and lame and old,	盲目、不自由、老いた癩者へ
To the children lost in the dark and cold	暗く寒い中で迷子になった子供たちへ
Who wander outside of His tender fold	誰が神様の優しく包まれた温もりの外で放浪しよう
May yet bring Heaven!	そして天国へと導くのかもしれない！)
	³⁸
	L. J. E.

また、『燃ゆる心』の最後の頁に押入された次のようなエリクソン夫人の詩。

Some widow brought her mite	(ある未亡人から灯をもらい
And through God's grace	そして神の愛によって
That glorious light was born	慶三の顔に
On Keizo's face ³⁹	あの光輝く光が生まれた)

この詩に出てくる慶三は『みそらの花』ので語られていた人物である。エリクソン

37 エリクソン夫妻は日本文学にも登場している。菊池寛(1888-1948)は1917年に書いた『父帰る』という作品の舞台を生地の高松に設定して、エリクソン宣教師の名前を出している。

新二郎 おたあさん、今日浄願寺の棕の木で百舌が鳴いとりましたよ。もう秋じゃ。...兄さん、僕はやっぱり、英語の検定をとることにしました。数学にはええ先生がないけに。

賢一郎 ええやろう。やはり、エリクソンさんとこへ通うのか。

新二郎 そうしようと、思っとるんです。宣教師じゃと月謝がいらんし。菊池寛『筑摩日本文学全集——菊池寛』p.43

38 『燃ゆる心』 差し込んだ葉書

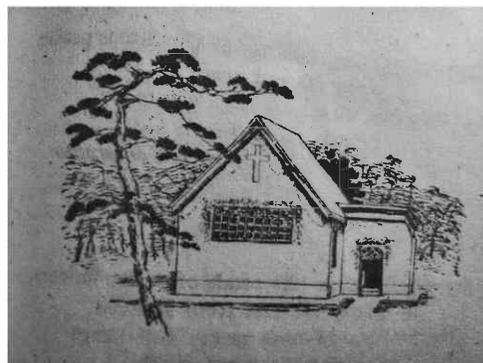
39 『燃ゆる心』 p.127

夫人は、欧米の信仰者からの寄付によって、慶三のような人たちが救われると語っている。つまり、神の素晴らしさへの寄付が結果としては慶三の救いにつながるのである。

以上の二つの詩はエリクソン夫人の手になるものであった。次に引く英訳された患者の詩にも同様のヒントが含まれている。

Bright lights are gleaming in our House of prayer	明るい光が輝いているのはわが祈祷所
(The little church	(それは他国の
Given by friends	友達から贈られた
In other lands)	小さな教会だ)
And childish faces bend in ecstasy	子供らしい顔は歓喜とともに向けられる
Above their sleeping dolls with golden hair.	金髪の眠れる人形たちの上に
Miyake ⁴⁰	三宅

この詩の中には、かっこで閉じこまれているところはエリクソン夫人の補足だと推測できる。⁴¹また、この詩は和服の日本人の子供が洋服の金髪の人形を抱かされている挿絵と教会の挿絵に囲まれている。挿絵によって、詩に語った上、挿絵で視覚で理解できるように寄付の効果を補強された。



『燃ゆる心』 p. 50、51

40 同書 p. 50

41 エリクソン夫人が詩の後にかっこで説明を加えることがほかのところでも見られる。たとえば、宮内岩太郎牧師（1871-1944）の詩も『燃ゆる心』に掲載されているが、その詩の最後に、*not a leper* 「癩者ではない」とあるのも、エリクソン夫人補足説明だと考えられる。（『燃ゆる心』 p. 54）

また、この詩と挿絵は海外の人々の基金によって島にこのような小さな教会が建てられたことを報告しているのである。また、人形の金色の髪の毛を考えたら、もしかして、金髪の複数の人形も寄付された物ではないかと考えられる。病気であるが、病気の気配のない日本人の子供たちの喜びと海外からの恵みのコントラストは非常に興味深い。救癩協会の出版物の中には、重い病気に病んでいる女性や子供の姿が珍しい。女性と子供が病気であっても、寄付によって普通に近い日常生活送られていることを出版物の中に強調する。エリクソン夫人の英訳書もその模様になって、病気であっても子供と女性を読者が理解しやすい日常生活のなかで描かれる。そして病気の悲劇を強調する際、男性の重病な姿を描かれることが多い。

これらの詩は、直接基金を集めることを目的とはしていないが、基金によって、どんな仕事ができるのかを述べている。これは基金の引きというより、基金の扱いを証明している。キリスト教宣の教活動を扱った本の中にはよく基金を集めるための封筒や葉書が差し入れられている。エリクソン夫人の本の場合も同様だったと聞いている。⁴²

確かに、『営所の外に出て』は雑誌広告の中で、基金を直接勧誘している。寄付の送り先の住所や寄付者の感謝欄が掲載されたうえ、「癩者のために売っているもの」の欄もあった。その欄には、現金を寄付したかったが、お金がないため、その代わりに宝石や貴重品を寄付した個人名が記載されている。そして、救癩協会が雑誌の中でその貴重品を報告していった。たまに、この欄に日本からの古美術や着物などが掲載されている。エリクソン夫人の孫のエレイン氏によると、エリクソン夫妻は給料や贈り物をほぼすべて布教の仕事に使ったので、宣教師からの寄付もこの活動に含まれている。

これらの例も含めて、エリクソン夫人の著作に共通しているのは、大島療養所を日本におけるキリスト教宣の成功例として描いていることだろう。長田穂波や三宅官之治のような熱心な信仰者がいたからこそ、大島療養所の霊交会が布教活動成功のシンボルとなったと言える。特に、穂波は理想的な改宗者だった。ただ、エリクソン夫人自身にはこの布教活動成功のシンボルということは当てはまるとは考えていない。

次に、エリクソン夫人の翻訳はどのようにキリスト教布教団の中で普及し、また利用されたのか、そしてキリスト教を理解し、入信した大島療養所のキリスト教信者のイメージがどのように使われたのかを考えていきたい。

42 直接お話をうかがったポベンカーク・ウォレン氏からの報告 (2011年12月15日)。この場を借りてお礼を申し上げたい。



1920年代前半日本でのアメリカ南部の長老派教会の宣教師たち⁴³

東京の高名な宣教師、ボネンカーク・ヘンリー氏（1905-1990）の息子であるボベンカーク・ウォレン氏の話によると、エリクソン夫人の訳書は、日本にいるキリスト教の宣教師や信者たちの中で幅広く読まれ、布教活動に利用されていたということである。⁴⁴また、日本における布教史をまとめた本『夜が明けるまで：南長老派ミッションの宣教の歴史』（*Until the Day Dawn*）の中では、“(Ōshima) became well-known to the church at home through Mrs. Erickson’s sympathetic translations of poems by the lepers”（大島療養所はアメリカの教会で、エリクソン夫人による癩者の詩の同情的な英訳によってよく知られています）と述べられている。⁴⁵医療使節団のバーゲス・ペリー氏も、1938年に日本の病院を巡った際にエリクソン牧師と共に大島療養所を訪れ、院長の野島泰治氏から受けたエリクソン夫人による翻訳書を手渡されたと記録している。⁴⁶このような記録から、エリクソン夫人による翻訳は日本におけるキリスト教の布教と、日本国外に大島療養所の存在を知らしめる活動の一部を担ったといえ

43 ロイス・ジョンソン・エリクソン『日本の白原』p.154

44 注④を参照。

45 Cogswell, James A., *Until the Day Dawn* p. 107. この日本語訳は筆者によるが、真山光彌 [ほか] 訳『夜が明けるまで：南長老派ミッションの宣教の歴史』が1991年に新教出版社によって日本語訳が出版された。真山氏は次のように引用を訳した。「高松近くの、ハンセン病の大島療養所〔青松園〕での夫妻の活動は、患者たちの作った詩を夫人が思いをこめて英語に翻訳したため、母国の教会でも有名になりました。」「夜が明けるまで」p. 143

46 Burgess, Perry, *Born of those Years: An Autobiography* (『その年に生まれた一自伝』) (1951年) p. 138. 翻訳書のタイトルは書かれていないが、詩の引用がありますので、バーゲス氏がもらった本は『燃ゆる心』とわかる。また、野島泰治氏が本を渡されたときに次のように言ったと記載している。“Their poems,” he (Superintendent Nojima) said, “translated into English by Honami Nagata and Lois Johnson Erickson.” (「彼らの詩です。」と彼 [野島先生] は言った。「長田穂波とロイス・ジョンソン・エリクソンによつての英訳です。」) (同書 p.138)。このように、野島氏の話により、エリクソン夫人と穂波がともに英訳を行った。

るだろう。⁴⁷

以上、日本で活躍していた外国人キリスト教宣教師の団体へのエリクソン夫人の翻訳の普及と利用の実態を見たが、彼女の訳書は布教活動団体や医療活動団体だけでなく、日本の一般新聞でも紹介された。1938年8月25日付の『大阪朝日新聞』には、エリクソン夫人についての記事が掲載され、『燃ゆる心』だけでなく、エリクソン夫妻とエリクソン牧師の写真も掲載されている。穂波の写真の代わりに、彼が書いた「筆跡」が掲載されている。この記事の冒頭では、大島療養所の入所者が「生きる屍」と呼ばれる一方で、入所者は「あらゆる苦悩、疑惑、煩悶を信仰の力で解脱して、不安もなく地上の穢れを離れつつパラダイスに住んでいる」と書かれている。この引用にも、すでに指摘した信仰と病気のコントラストが読み取れる。また、穂波の写真がないことによって、読者が「生きる屍」というイメージをもって、そのコントラストをさらに強調されると言えるだろう。



1938年8月25日の『大阪朝日新聞』（未確認）

47 1920年代前半から、世界のハンセン病療養所ツアーは珍しくなかった。もちろん、外国からの医師の訪問は、四国よりも長島愛生園や東京全生園ののほうが多かったと考えられる。林文雄『世界の癩を尋ねて』（長崎書店、1934年）を参照。外国の医師による日本の療養所についての記録には、以下を参照。cf. H. C. de Souza-Araujo, *Leprosy: Survery Made in Fourty [sic] Countries (1924-1927)*, 1929年; Raoul Follereau, *Tour du monde chez les lépreux*, 1953年, R V Wardekar, *Round the world of leprosy*, 1955年。

療養所の訪問についての著作は医師が書いたものに限らず、新聞記者や作家が旅行記として出版したものも少なくない。詳しくは Rod Edmund, *Leprosy and Empire*, p. 220-244を参照。

しかし、ここで注目したいことは、この記事では穂波の文学よりもその信仰に焦点が当てられている点である。穂波の人生がかなりメロドラマ的（「生きる屍」）に描かれる一方で、彼の詩よりも「三十数年の久しきにわたって救癩運動に一身をささげるアメリカ人夫妻⁴⁸」やエリクソン夫人の訳書が脚光を浴びている。この記事の取り上げ方を見る限り、穂波の文学作品自体よりも、それが英訳された事実や、大島療養所がアメリカとの「国際交流」の場となっていることの方が注目集めているのである。

また、この記事では、穂波の文学は、彼がハンセン病患者である事実よりも、キリスト教の信仰に基づくものであることが強調されている。穂波はキリスト教作家としては知られているが、癩文学の作家としてはあまり知られていないのである。しかし、穂波は信仰とハンセン病の両方について執筆を行っている。ではなぜ、穂波の癩文学はそれほど認知されなかったのか、それを次に考えてみたい。

端的に言えば、それは穂波のスタイルの問題、また一般の日本人とキリスト教理解に大きな関わりがあるのではないかと考えられる⁴⁹。穂波の文学は統語が難しい上、キリスト教の哲学者やキリスト教の歴史への隠喩も用いられており、一般の日本人にとって親しみにくいものであったと思われる。当時の評論たちの新聞記事と同じように、穂波の作品自体よりも穂波の信仰やエリクソン夫人の翻訳活動に注目した。たとえば、癩予防協会の多田貞久氏は、癩文学と救癩運動に関する記事の中で、穂波の位置について次のように述べている。「非常に熱心なクリスチャンだそうで、その詩も高邁な真理の探明と愛の探究とに燃えてゐる。本当の人道主義と渴仰の文字がその文学の根本を型づけてゐる。文壇には未だ認められてゐないが、十数年前に作った著書の序文は、吉井勇、与謝野晶子の両歌人が飾ってゐるし昨年秋、高松の米人宣教師が長田君の詩集を英訳して、米国に紹介された⁵⁰」。阿部氏は穂波の評価に詳しいのでここで一つの例に限ることにする⁵¹、このように、多田氏のような評論家からは、穂波の文学はハンセン病の経験を描いた作品というよりも、宗教信条を述べた文学として扱われていた。先に紹介したエリクソン夫人を取り上げた新聞記事でも、穂波の文学自体よりも、彼のキリスト教信仰やその作品が英訳されたという事実の方に重点が置かれていた。

また、ハンセン病文学を紹介する別の新聞記事の中では、「最初の癩作品は長田穂

48 「“癩患者の聖書” 米人・感激の英訳—“大島の詩人” 三十星霜の詩篇 海を渡る『燃ゆる心』」長島愛生園神谷書庫のスクラップブックに「大阪朝日新聞、13.8.25」と記述、但し、大阪朝日新聞での掲載が未確認。

49 穂波作品のスタイルと読みにくさについては、阿部（2013）が詳しい。また、Kathryn Tanaka（2012）にも参照。

50 多田貞久「思い出る人たち（文芸に精進する癩者達）」『医事口論』No.1390（1939年3月）p.43

51 阿部、2013。

波の『靈魂はまばく』⁵²とされ、穂波自身についての言及は、彼の信仰心とさの作品の英訳紹介についての説明に留まっている。この例からも、穂波の文学は「癩作品」として具体的に扱われず、「アメリカで好評を博してゐる」⁵⁴ことの方が注目されていることがわかる。

以上で見てきたように、穂波の文学は癩文学としてよりもキリスト教文学として扱われてきた。しかし、穂波の作品を実際に読んでみると、その信仰心と病気の経験は簡単に切り離せないことがわかる。彼は病気になったからこそ深い信仰心を持つようになったと言えるだろう。

5. 結論

最後に、エリクソン牧師とエリクソン夫人のその後について紹介したい。1941年に大洋戦争が始まった際、エリクソン夫妻は強制的にアメリカに帰国させられた。エリクソン牧師はかなり高齢であったため、帰国後新しい職を得られず、二人は巡回牧師として各地の教会を回った。夫妻の生活はかなり厳しいものだったようで、エリクソン夫人はピアノを教えながら日本のキリスト教作品の翻訳を続けた。帰国後も、最後まで日本のことを忘れなかったのである。

1946年、エリクソン牧師はバージニア州のリッチモンド市で亡くなった。その後、エリクソン夫人は二人の娘の家族の元で半年間ずつ暮らす生活を続けたが、娘の援助にもかかわらず、結局キリスト教の貧民求護センターに入ることになった。このセンターは高齢者ホームとして、半分は精神隔離病院として運営されていた。高齢になり、死期が近づくと、彼女は精神病院に近い部屋に移動させられた。こうしてエリクソン夫人は最後に、精神病院に隣接する場所でこの世を去ったのである。孫のルーベン・イレイン氏の話によると、エリクソン夫人は、最後の最後まで、日本のこと、大島療養所の入所者のことを語り続けていた。エリクソン夫人は人生の半分を日本で過ごしたため、アメリカには友人も仕事もほとんどなく、その死後、夫と同じリッチモンド市の長老派教会の墓地に埋葬された。

母国のアメリカからも、人生を捧げた長老派教会も忘れ去られたエリクソン夫妻の

52 「民雄、海人の名に輝く一宿命の文学—癩文学の全貌」日本読書新聞（1939年3月15日、旬刊）。穂波の『靈魂は羽ばたく』のタイトルの誤りについては原文ママ。

53 この記事は、穂波を最初の「癩作品」の作家として扱っているが、それは誤りである。「癩文学」というジャンルの最初の作品は九州療養所（現在、菊池恵楓園）の『檜の影』という同人雑誌に掲載されている。詳しくは、田中キャサリン「戦前ハンセン病療養所における短歌による交流—九州療養所の『檜の影』を中心に」『ハンセン病市民学会年報二〇一三』開放出版社（2014年）p. 195-204を参照。

54 「民雄、海人の名に輝く一宿命の文学—癩文学の全貌」日本読書新聞、（1939年3月15日、旬刊）。

遺産が、今も大島青松園に残されている。国境を越えてハンセン病文学の翻訳と普及を行ったエリクソン夫妻の物語は苦難に満ちたものだが、日本の文学やキリスト教、ハンセン病の歴史のにおいて、非常に重要な役割を果たした崇高であったと言えるだろう。

穂波の作品については、阿部康成氏によってすでに再評価が行われているが、その再評価にあたって、エリクソン夫人の翻訳の意義も同時に検討すべきだ、という問題提起を行っている。エリクソン夫人の英訳がいわゆる「翻訳」ではなく「意識」であったことによって、穂波の文学が英語で一般の人々にも親しみやすい形に姿を変え、穂波だけではなく霊交会の会員たちの文学も布教活動に採用可能なものになった。また、その翻訳が目されることで、穂波はキリスト教作家として、新聞記事などで紹介されるようになった。その意味では、エリクソン夫人による「意識」は、穂波や霊交会の文学や社会的認知のきっかけとなったと言えるだろう。

穂波の作品は、先に述べたように、英訳を通じて新聞記事に取り上げられたのだが、本論文ではその英訳のあり方は単なる「翻訳」というよりも「意識」に当たるものである点を強調してきた。また、そのような「意識」という方法は、穂波の作品を欧米の読者にとって理解しやすいものにしたと考えられる。共著とさえ言える、エリクソン夫人の「意識」はこうして複数の声の交錯する「間テキスト」になったと言えよう。

参考文献

和書

- ・青木恵哉『選ばれた島』新教出版社、1972年
- ・荒井英子『ハンセン病とキリスト教』岩波書店、1996年
- ・阿部康成『『霊交』にあとがきを記す—香川県大島の療養所をあらわす点描』『滋賀大学経済学部 Working Paper Series』No. 150、2011年7月
- ・——「読めない詩—癩療養者長田穂波と訳詩ロイス・エリクソン」『滋賀大学経済学部 Working Paper Series No. 202』2013年九月、p. 1-29
- ・長田穂波『みそらの花』光友社、1928年
- ・——『靈魂は羽ばたく：詩集』光友社、1928年
- ・カグスウェル J. A. 著（真山光彌 [ほか] 訳）『夜が明けるまで：南長老派ミッションの宣教の歴史』（日本キリスト教史双書）新教出版社、1991年
- ・川本皓嗣『日本詩歌の伝統—七と五の詩学』岩波書店、1991年
- ・菊池寛『ちくま日本文学全集21 菊池 寛』、筑摩書房、1991年
- ・多田貞久「思い出る人たち（文芸に精進する癩者達）」『医事口論』1390号、1939年3月、p. 43
- ・田中キャサリン「戦前ハンセン病療養所における短歌による交流—九州療養所の『檜の影』を中心に」『ハンセン病市民学会年報 2013』開放出版者、2014年、p. 195-204

- ・「“癩患者の聖書” 米人・感激の英訳—“大島の詩人” 三十星霜の詩篇 海を渡る『燃ゆる心』」長島愛生園神谷書庫のスクラップブックに「大阪朝日新聞、13.8.25」と記述保存。
- ・「民雄、海人の名に輝く—宿命の文学—癩文学の全貌」日本読書新聞、1939年3月15日、旬刊
- ・西脇勉「エリクソン宣教師と大島療養所—我が国救癩史の一齣に残したある宣教師の軌跡」『四国学院大学論集』第42号（1978年12月）p. 41-57
- ・林文雄『世界の癩を尋ねて』長崎書店、1934年
- ・ユージン・A・ニイダ、チャールズ・R・テイバー、ノア・S・ブランネン著（沢登春仁、升川潔訳）『翻訳—理論、実際』研究社、1973年

洋書

- ・Aoki, Keisai. *Mission to Okinawa*. Trans. Anonymous. Hong Kong: Christian Book Room, 1970
- ・Bovenkerk, Warren, personal interview, December 15, 2011
- ・Burgess, Perry, *Born of those Years: An Autobiography*, New York: Henry Holt and Company, 1951
- ・Cogswell, James A. *Until the Day Dawn*, United States: Board of World Missions, Presbyterian Church, 1957
- ・Edmund, Rod. *Leprosy and Empire*. Cambridge University Press, 2009
- ・Ericson, Lois Johnson. *The White Fields of Japan*, Whittet & Shepperson, Printers, 1923
- ・—*Highways and Byways in Japan: Incidents of Daily Life in a City on the Inland Sea*, Fleming H. Revell Company, 1929
- ・—*Hearts Aglow: Stories of Lepers by the Inland Sea*, Printed by Kyōbunkan for the American Mission to Lepers, 1938
- ・—*Songs from the Land of Dawn*, Friendship Press, 1949
- ・—*Souls Undaunted: Verses from the Christian Poetry Club at the Hospital for Lepers, Oshima, Japan*, The American Mission to Lepers, n.d.
- ・—*Escaped as a Bird: Verses from a Japanese Leprosy Hospital*, The Leprosy Mission, n.d.
- ・—*Songs from the slums: poems by Toyohiko Kagawa*. Tennessee: Cokesbury Press, 1935
- ・—“Not in Vain in Japan,” *Foundations of World Order: The Foreign Service of the Presbyterian Church, U.S.* Tennessee: John Knox Press, 1941, p. 121-146
- ・Erickson, Rev. S. M. “With Christ at Oshima,” *Without the Camp: the Journal of the Mission to Lepers in India and the East*, No. 134 (April 1930), p. 49
- ・—“His Broken Body,” *Without the Camp: the Journal of the Mission to Lepers in India and the East*, No. 141 (January 1932), p. 16
- ・Follereau, Raoul. *Tour du monde chez les lépreux*. Paris: Flammarion, 1953
- ・Luben, Elaine, personal interviews, October 2011 ~ February 2012
- ・Nagata, Honami, and Lois Erickson, *Hearts Aglow: Stories of Lepers by the Inland Sea*, Kyobunkan for the American Mission to Lepers, n.d. (1938)
- ・de Souza-Araujo, H. C., *Leprosy: Survery Made in Fourty [sic] Countries (1924-1927)*. Rio de Janerio: Instituto Oswaldo Cruz, 1929

- ・ Tanaka Kathryn, “Through the hospital gates: Hansen’s Disease and modern Japanese literature,” Doctoral dissertation, University of Chicago, 2012
- ・ ———“Contested Histories and Happiness: Leprosy Literature in Japan.” *Health, Culture and Society* Vol. 5 No. 1 (2013), p. 99-118
- ・ Venuti, Lawrence, “Translation, Intertextuality, Interpretation,” *Romance Studies* Vol. 27 No. 3 (July 2009) p. 157-173
- ・ ———*The Translator’s Invisibility: A History of Translation* (2nd ed.) Routledge, 2008
- ・ Wardekar, R V, *Round the world of leprosy: a travel book and a treatise on leprosy*. Wardha, India: Gandhi Memorial Leprosy Foundation, 1955